

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-003	インドネシア・スハルト体制における歴史解釈のタブー形成		
	インドネシア	インドネシア大学	2000.9 ~
	今村祥子	東京大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究のテーマは、インドネシア・スハルト体制における政治的タブーの形成である。特に、政治をめぐる歴史が政府によって独占的に定義・解釈され、それ以外の解釈がタブーとされてきた過程を考察したい。

過去をいかに定義するかということは、現体制の正当化にとって非常に大きな意義を持つ。スハルト体制の場合、体制の出発点である1965年の9・30事件をいかに解釈するかは、スハルトの正当性を大きく左右する。あるいは、独立戦争の際の軍__役割をどう評価するかが、スハルト体制下の国軍の二重機能の正当性を決定する。また、スカルノという人物の功績をいかに解釈するか、すなわち「独立の英雄」として国家を挙げて称えるのか、それとも「革命」の続行に没頭して国民経済を崩壊させた人物として定義するかも重要である。後者の解釈を強調することによって初めて、スハルトの「開発の父」としての歴史的意義が明示されるからである。このように、過去の定義が現在の意義づけに直結しているとすれば、スハルト体制は政治をめぐる歴史をいかに定義し、またそれ以外の解釈をいかに抹消し、タブーとしてきたか。これが本研究で考察したい問題である。

この歴史解釈のタブーというテーマを取り上げる背景には、スハルト政権下における国民の「非政治化」という現象をいかに説明するかという問題関心がある。既存研究でしばしば指摘されてきたように、スハルト体制の安定を支えてきた要因の一つが、この現象であった。そして「非政治化」を生んだ要因を説明する際にこれまで注目されてきたのは、政党の無力化や、ゴルカル組織への社会勢力の取り込みなど、主として制度的側面である。しかし、体制批判につながるような政治的問題を決して公に語ろうとしないというスハルト体制下の人々の姿勢が、いかに国民一人一人に植え付けられたかを考察するには、政治的タブーの形成とその普及という国民の内面への働きかけに注目する必要がある。本研究はこのような問題関心からタブーの問題に取り組もうとする物である。

氏名：今村祥子

所属：東京大学大学院法学政治学研究科

留学先国：インドネシア

留学先機関：インドネシア大学

留学期間：2000年9月～2003年3月

【研究テーマ】

インドネシア・スハルト体制における歴史解釈のタブー形成

【成果報告】

1. 当初のテーマについて

当初の研究計画では、スハルト大統領の下のインドネシアにおいて、政治にまつわる歴史解釈のタブーがいかにか形成され、崩壊したかを解明することを目標としていた。スハルト期のインドネシアでは、政府公認の歴史が編まれ、それに矛盾する歴史解釈が抹消され、体制の崩壊とともに、かつて抹消された歴史が、自らの存在を主張し始めた。私がインドネシアに渡ったのは、スハルト体制が崩壊した3年後であり、まさにタブーが崩れつつある過程に居合わせたことになる。書店には、かつての公認の歴史を記した本と並んで、それに対して意義を申し立てるかのような内容の本が並んでいた。また、映画館では、スハルト体制誕生の経緯となった1965年の9・30事件について、スハルト体制の解釈を「ウソ」と言いきるオーストラリアのドキュメンタリー映画が放映されていた。

この現実を目の前にして、留学当初の課題となったのは、ここからどのような議論を組み立てるかであった。一つの体制が、正当性維持に好都合な歴史的事実を意図的に拾い集めたり、さらに事実を歪曲したりすることは、珍しいことではない。また、体制によって抑えつけられていた歴史解釈が、体制崩壊後に表に出始めるというのも十分ありうることである。これらの事実をただインドネシアの事例に沿って記述するだけでは、「人は立場によって異なる歴史を語る」という平凡な話に終わってしまう。歴史とタブーというテーマから出発して、現在のインドネシアの一断面を切り取る議論を組み立てるには、さらに新たな視点を加える必要があるのではないか。この視点を探すことから、作業が始まった。

2. 視点の模索

新しい着眼点を探るため、スハルト政権崩壊後に出版されたさまざまな現代史の本を読み、新聞や雑誌で歴史解釈や歴史教育の話題を探し、既存研究を読むという作業が続いた。また、若い世代への聞き取り調査のなかで、彼らがこれまで受けた歴史教育と、それに対する彼らの感想やイメージを尋ねた。そのなかで、ひとつ気になる現象に気づいた。当初から興味を持っていた、インドネシア共産党 (Partai Komunis Indonesia, 略称PKI) の問題である。

PKIは、スハルト体制下、1965年の9・30事件の首謀者として、決して許しえない国家の裏切り者と位置付けられてきた。この事件は、まだスカルノ大統領の時代であった1965年の9月30日深夜から

翌日未明にかけて、陸軍の将軍6名が拉致・殺害され、遺体が空軍基地の井戸に捨てられたというものである。スハルト体制の説明では、事件の首謀者はPKIおよび一部の空軍、陸軍兵士らであり、彼らがスカルノ大統領の健康悪化に乗じて権力奪取を試みたのだとされた。さらに政府は、PKIメンバーが将軍らを殺害した際に残虐な拷問を加えたという宣伝を展開する。このような扇動によりPKIに対する憎悪が煽られ、事件後、インドネシア各地で共産党員や関係者に対する大規模な虐殺が起こった。この後、スハルト体制において「PKI」は非国民の烙印を意味するようになった。

しかし、スハルト体制の崩壊後、9・30事件の真相は果たして政府の説明どおりであったのかという問題が、タブーではなくなる。「スハルトは事件が起こることを前もって知っていた（にもかかわらず、敢えて放置し、自分に有利な状況を作り出した）」という事件関係者の証言も出始める。また、殺された将軍らの遺体には拷問の痕などなかったことも、次第にインドネシアの人々の知るところとなる。当時、将軍らの遺体の検死を行った医師が、「拷問の痕なし」とする報告を行ったところ、政府から「それでは困る」と言われたと証言するドキュメンタリー映像が国内でも公開された。私自身の調査においても、「スハルトも9・30事件になんらかの形で関与していたと思う」と答えた人も含め、スハルト体制がこれまで国民に提示してきた歴史は必ずしも真実ではないと考える人たちが予想以上に多かった。つまり、9・30事件の真相はいまだに謎であったが、政府公認の歴史以外はタブーであるという雰囲気は、明らかに崩れ始めていた。

だが、この問題には理解できない点が二つあった。第一に、政府の提示してきた歴史にウソが混じっていることに人々が気づき始めたにもかかわらず、PKIのイメージの改善が起こるどころか、PKIに対する恐怖心と拒絶反応は容易に消えないという点である。アブドゥルラフマン・ワヒド大統領のもとで、共産主義を合法化しようとする動きもあったが、時期尚早であるとして実現には至っていない。また、聞き取り調査の解答者のなかで、9・30事件に関するスハルト政権の説明に疑いを抱いている人たちに、改めてPKIのイメージを聞くと、「それは悪いに決まっている」との答えが返ってきた。タブーの崩壊がなぜPKIへの拒絶感を緩和しないのか。

PKIに関するもう一つの疑問は、権力者の側の恐怖である。すでに述べたように、9・30事件の後、各地で共産党関係者もしくは関係者とみなされた人々への大規模な虐殺が行われ、さらに大量の人々が政治犯として逮捕された。その後、70年代ころまではPKIの地下活動の存続が明らかになることがあったにせよ、PKIは組織として壊滅したと断言していいだろう。それにもかかわらず、スハルト政権はその崩壊にいたるまで、不穏な動きがあるたびに「PKIの脅威」を訴えつづけた。ここでの「PKI」は、文字通りの「共産党残滓」ではなく、反逆者を意味するレトリックであったかもしれない。だが、レトリックであるにせよ、政府が「PKIの脅威」という言葉を利用せずにいられなかったのは、自らのコントロールの及ばない勢力が存在することを意識しており、それに対して不気味な脅威を感じつづけていたゆえであろう。では、なぜそのような恐怖が生まれたのか。

これらの疑問に興味を持つなかで、従来のテーマである「歴史解釈のタブーの形成と崩壊」を考え

る際に、「何者かに対する恐怖」という視点を加えて見るようになった。タブーを生み出す裏にある恐怖はいかなるものか、そして、タブーが崩れた後に、それでもなお残る一見非合理的な恐怖の感情は、いったい何を意味しているのか。ここから議論を組み立てるヒントを得られないかということである。

さらにもう一つ、「恐怖」の問題について考えさせられるきっかけとなったのは、親しくしていた人物にお金を盗まれるという事件だった。私はこの出来事をきっかけに、インドネシアの国家機関、特に警察や裁判所など、正義を保証すべき司法機関が、いかに国民から信頼されていないかを実感として知った。同時に、身の安全と利害に対する制度的かつ確実な保証が存在しない場合、そこに住む者にどれだけの恐怖、不安、無力感、その裏返しとしての潜在的怒りを生みつけうるかということ、自分自身の経験として理解した。

この出来事は、恐怖の問題に、国家の統治のあり方、秩序のあり方が密接に絡むことを示唆してくれた。統治が恣意的で、法の支配が存在しないとき、そこにどのような恐怖が生まれるかという問題である。まず、国民にとって、法の支配の不在は、合法と違法の境界が不明確であり、また、違法である場合の罪の軽重の判断基準も不明であることを意味する。誰が守られ、誰が守られないかは、公権力のそのときどきの判断に委ねられる。したがって、国家の法的枠組の中で、自分がどのような位置を占めるのか、国民が自分で正確に判断できないという不安と恐怖を生む。

他方、国家自身にとっても、法の支配の不在は不安要因となりうる。なぜなら、第一に、恣意的であるがゆえに、上に記したような国民の潜在的怒りを蓄積させることになる。また第二に、支配の恣意性は、逆に国民によって利用されるおそれがあり、そこに統治の不徹底が生まれる。たとえば、留学中の観察によれば、ごく普通の庶民がトラブルに巻き込まれたり、警察にたかられたりした場合、よく行われる手段は、国軍兵士に私服姿で付き添ってもらって交渉するという方法である。つまり、庶民は公権力が恣意的に行使されることを熟知している。同時に、いかに恣意的なものであろうと、権力は権力であり、強制力を持っていることも理解している。そこで、公権力の恣意性を逆手にとって、それを私的に利用し、身を守るという行動に出るのである。国軍兵士の付き添いを頼む方法には、知り合いや親戚というコネクションを利用する場合もあれば、報酬を払って雇う場合もある。いずれにせよ、公権力が国民によって私的に利用されるという点で、国家の中核から見れば、そこにコントロールの及ばない領域が生じることになる。

これに関連して付言すべきは、私服姿の警官のことを、インドネシアでは「プレマン(preman)の格好の警官」と呼ぶことである。「プレマン」とは「私服の」という意味と同時に「ごろつき」をも意味する。公権力が私的に利用されることがありうるということは、公権力の行使とならず者の脅しとの区別も限りなく曖昧になるということである。つまり、公権力にとって、ならず者の力が対抗すべき脅威となりうる。

このように、支配の恣意性という統治のあり方が、国民、政府の双方に、恐怖と不安を生み出すのである。

以上の経緯により、「タブー」の問題に加え、新たな手がかりとして、「恐怖」、「統治のあり

方」、「秩序の形態」という視点を加えた。

3. 新たな問題設定と調査

こうして、上記の視点をもとに、改めて問題を設定した。第一に、インドネシア国家には植民地時代以来、法の支配と公権力の制度的行使によって支えられた秩序は存在したことがないのではないかと仮説を立てる。すなわち、上に述べたような、公権力とごろつきの力の区別の曖昧さや、被支配者による公権力の私的な利用、法的枠組のなかでの自己の位置付けの曖昧さなど、「恣意的支配ゆえの恐怖」が、支配する者とされる者のなかに潜在的に存在しつづけてきたのではないかと考える。

第二に、そのような連続性に着目しつつも、歴史を区切る節目として、独立革命、9・30事件とその後の大量虐殺、1980年代前半のペトルス事件（都市部において、いわゆるならず者が、何者かによって大量に銃殺された事件。後にスハルトの命令であったことが明らかになる）、及びスハルト体制の崩壊を取り上げる。これらは、何が合法か、何が正義か、そしてインドネシアにおける秩序とは何かという問題に、暴力的な変化をもたらした事件である。第三に、これらの変化を経験しながら、各時期にどのようなタブーが生まれ、その裏にはどのような恐怖が存在するのか、また各時代において、公権力といわゆるごろつきの力とのせめぎあいや、権力者と被支配者との公権力をめぐる関係は、いかなる様相を呈してきたのかを明らかにする。

以上の課題を考察するため、上に挙げた4事件に関する言説の調査を行っている。新聞や雑誌などのメディアにおいて、各事件がどのように取り上げられ、その後どのような文脈で登場しているかを追いかける作業である。インドネシア滞在中に、9・30事件とペトルス事件に関する資料を収集してきた。現在も日本で入手可能な資料の収集作業を続けており、同時に、9・30事件と大量虐殺、およびPKIが、どのような文脈で引用されているかについて、分析作業を行っている。この二つの事件は、国家の枠組の中で誰が正当で誰が正当でないか（誰がPKIか、誰が殺されるべきならず者か）、各自が自分で判断しえないという国民の恐怖と、どこまでが味方でどこからが敵なのか、境界を見定めることのできない政府の恐怖とを象徴的に表している。この双方の恐怖を反映しているエピソードや発言の収集を進めている。

4. まとめ

「政治にまつわる歴史解釈のタブー」という、容易にはとらえがたいテーマをもってインドネシアに渡り、具体的な仮説を立てるまでに、多くの時間を要した。しかし、当初は「タブーの形成と崩壊」という漠然としたトピックに過ぎなかった関心事が、現地での調査、観察、経験を通じて、「統治」、「秩序」、「恐怖」などの新たな視点を得て、インドネシアという国家の統治のあり方の連続性と、そのなかでの歴史的変化について考察するテーマへと広がりを得た。今後は、短期でのインドネシア滞在を繰り返しながら資料収集と調査を続け、博士論文の執筆にとりかかりたい。



東ジャワ第二の都市マランの朝市



イスラム断食明けの時期にマランの礼拝場にて